

所属ゼミ	小林喜一郎研究会	学籍番号	80630145	氏名	大久保 史朗
(論文題名)					
<p>ビジネスの仕組みイノベーションにみる競争優位戦略 ～成熟産業の3番手企業の採択すべき勝ち残り戦略への一考察～</p>					
(内容の要旨)					
<p>かつて、製造業に代表される日本企業の多くは、自らの事業領域において競争優位性を構築・強化するために、独自技術の開発によって新製品を生み出すプロダクト・イノベーションと同時に、より効率的で合理的な生産システムを構築するためのプロセス・イノベーションに取り組んできた。</p> <p>しかし、技術革新のスピードと高度化・複雑化は、いかに巨大な企業であっても、単一の企業が、すべての領域をカバーしたり、ゼロから開発することの限界を示している。さらに、経済のボーダーレス化、市場のグローバル化がもたらす空間の拡大は無限の多様性をもたらすと同時に、業界や業態、産業の垣根を越えた高度に複雑な競争状況を生み出し、構築すべき競争優位性にも多面的な要因が求められている。そうした中で、単一の企業が全方位的な競争優位性を構築することは、もはや不可能である。</p> <p>特に3番手企業は少なくともトップ企業と同じ全方位（フルライン）型の事業展開からの軌道修正が必要になるだろう。かつて強い企業の代名詞だった「総合」の看板（総合電機や総合商社など）は、ごく一部のトップ企業でしか適用しない。</p> <p>それ以外の企業は、経営効率の悪い事業をアウトソーシング（外部委託）するなど、経営資源の傾斜配分を急ぐべきだ。</p> <p>つまり、自己完結型の事業展開によって市場を制覇するのではなく、自社の弱みを補い、あるいは自社の強みをさらに強化する他の企業との連携が必要となるのではないか。</p> <p>互いに異なった強みを持った企業が戦略的に手を組み、それぞれのコアコンピタンスを融合することで、単独の企業では生み出すことのできなかつた新しい価値の生まれる可能性が高まり、自らのコアコンピタンスの強化に経営資源を配分することも可能になるはずである。</p> <p>本研究は企業がビジネスの世界で生き残るには、新製品を開発・発売するプロダクト・イノベーションや生産プロセスの合理化と省力化を追求したプロセス・イノベーションに留まらず、ビジネスの仕組みそのもの自体でもイノベーションを起こす必要に迫られているとの見地から、ビジネスモデル・イノベーションの主要な事例と概要を明らかにしようとするものである。</p> <p>しかし、異なるコアコンピタンスを持つ複数の主体が提携力を発揮していくためには、これまでとは異なるマネジメントが必要となる。</p> <p>異なる主体の融合が生み出す提携力を活用していくためには、新たなバリューチェーンの構築が鍵を握ることに着目し、新しいビジネスの仕組みイノベーションの成功の要因を、事例研究を通じて明らかにする。</p> <p>事例研究ではビジネスモデル・イノベーションに成功したビジネスモデルを外部機能活用型・専門機能特化型・取引市場創造型の3類型とし、従来の垂直統合型のビジネスモデルとの比較を中心に調査・分析を行いながら、類型毎のビジネスモデルイノベーションの成功要因の共通要素を結論として導き出す。</p> <p>最終章において、成熟産業であり且つ伝統的な垂直統合型ビジネスモデルを業界スタンダードとしている石油業界における現状の戦略上の問題点を鑑みながら、事例研究で抽出した結論に基づき、コスモ石油の採択すべき戦略提言を行う。</p>					